



平成28年8月25日

佛教大学附属幼稚園

店員さんのいないお店

園長 藤堂俊英

食料品や日用品を一手に扱う大型店が出来る前、まだそんなに遠い昔のことではありませんが、よく農家の人が野菜や花をリヤカーで引き売りする姿を見かけました。また耕作地に近いところでは、畑の近くに無人の野菜売りの棚が設けられ、傍に置かれている筒や箱にお金を入れ、買って帰れるところがありました。顔を合わせ話をするわけではないのに、その野菜を育て、そこに置いて行った人を感じる、ほのぼのとした余韻のようなものが無人の棚にはありました。次に紹介するのは、くすのきげのりさんの『Life(ライフ)』という絵本です。

小さな町のはずれに「ライフ」という名の店員さんのいないお店がありました。お客は気に入ったものがあれば持って帰ります。その代り自分が使わなくなったものや、誰かに使ってほしいものを置いて行くのです。花を育てることが好きだったおじいさんに先立たれたおばあさんは、「おじいさんが用意していた春に咲く花のタネです」というメッセージカードを添えて、タネの入った幾つもの小さな紙袋を棚に置きました。おばあさんはふと目についた「思い出はいつまでも」というメッセージカードが添えられた写真立てを持って帰りました。次にやって来た男の子は花のタネの入った紙袋を取り、代わりに「すごくたのしくて、おぼえちゃったよ、ぼくもたいせつによんだよ」というメッセージを添えて、男の子が小さかった頃、おじいちゃんが「ライフ」から持って帰ってくれた絵本を再び棚に返しました。次にやって来たのはベビーカーに女の子を乗せた若夫婦でした。二人は絵本と花のタネの入った紙袋を取り、代わりに「二人の時間も幸せでしたが、今はもっと幸せです」というメッセージカードを添えてコーヒーカップを棚に置きました。次にやって来た若いカップルはコーヒーカップと花のタネの入った紙袋を取り、代わりに「私たちはこれからずっと、いつでも話すことができるようになりました」というメッセージカードを添えてレターセットを棚の上に置きました。次にやって来た女の子はレターセットと花のタネの入った紙袋を取り、代わりに「はじめてこのベストを着たとき、少しおねえさんになった気がしたわ、きっとあなたもよ」というメッセージカードを添えて、少し窮屈になったベストを店の壁のハンガーに掛けました。

「ライフ」とはこのようなお店なのですが、まだ悲しみの癒えないおばあさんが再びお店にやって来て、今度は夏に咲く花のタネの入った紙袋を置こうとドアを開けたその時のことでした。おばあさんは店中がまるでおじいさんの花畑のように見えるのを見て息をのみました。花のタネを持ち帰り、育て、咲かせた人たちが、それぞれのメッセージを添えて飾ってくれていたのです。メッセージカードを読むおばあさんの心には、あたたかな明るい風がふいていました。おばあさんはその花を持って帰りおじいさんの写真立ての傍にそっと飾りました。

何事にも効率性と迅速性が優先される現代にあって、何か見落としている大事なことはないでしょうか。秋は実りの収穫と共に、来年の春に咲く花のタネを蒔く時節です。「人生」を意味する「ライフ」という名のお店のように、自他が共に喜び合える花の種蒔きを心がけ、育て、咲かせて行きたいものです。

